



曇り日の波瀾の巻に向ひあかす、秋風に
 ほか暖かい春先の日を浴びながら、夏の
 虫の数々、けむりの草の上に座して、
 其まゝ愛するばかりだ。
 をれ、ぼしをれるでよし、唯、草の自然の
 萌えぬ如く、枯草にちつて、し
 結局私には草の好きさか。
 草に座して、青草にあつて、

郊外より

(私の雑筆の一部)

草に座して

小林恒友

鳥居

本問文庫
 文庫 14
 A130



小恒

いく黄土色の葉さまに見入りおから、思ふこ
 とだ。自然は妖しくおあり、寂しくおあり、
 聖しくお悲しくお感ぜられる。まあど
 うでもよい。唯此處に私が生きて居る地上に、
 私の画生活の脚がくつ即りて居るへすれはよ
 い。そのが唯安養に自分を生かして行くの
 だ。ふと、ルボンの事を胸に浮かべる。
 ルボンといふ人は、偉大な人だ。愛らしい
 先輩だ。偉大だと思ふ人には愛らしい人は牧
 いが、ルボンは愛らしさの輝くお為めに

(1020) YH特製

ルボンの愛らしさの輝くお為めに

の偉大にさへ思へる。彼れこそ禁上座して
 唯あるがまゝの、~~ル~~ルボンの自然の美に正面しお
 かく、~~ル~~ルボンの寂寥との風を画面に塗り込
 んだ。彼れの小さい画面の中に、彼れの自然は
~~ル~~ルボンのあかたを輝かし居る。彼れの自然は
 在るの多くの画家達に、~~ル~~ルボンの自然は
 の、~~ル~~ルボンの自然は、~~ル~~ルボンの自然は、
 答へるには答へず。だが偉大な藝術だ。
 答へる人はおあからず。千ヨツピリした
 術さ。近代藝術のももか、千ヨツピリし

2. 小画

在時を待つより、ルビンの筆も面白い線
 画と ~~彼~~ 位に彼等は考へてくれろの心。
 彼のよりルビンを愛して居るはいい。愛
 する利故に偉大が ~~と~~ といは考へ ~~て~~ は考へ
 まい。
 言ふまでもなく、彼らの藝術は所謂偉大不
 量はあり。外の人に較べれば幾十倍の
 といふ人ふことば、藝術の肉體に於ること
 はありてはかりか。量ばかり多くつて、生
 涯が二線が三線にのみ、まぶし ~~し~~ て居る多

(1020) YH特製

くの画家に較べれば、ルビンはアメリ
 ソーと全どり、第一線の愛に立つた人だ
 った。
 全く彼等は ~~彼~~ 愛に立つた人だ。あり
 のま、に自然に見入つた愛をうた。夏目漱
 石の「草枕」といふ小説の中に、其言葉は
 つきり覚へぬけぬ ~~と~~ 繪は、長年めくり遣は
 ぶ ~~し~~ として居る意人に、~~オヤ~~ 考へに居るか
 といふ様に描かぬといけぬ。といふ一行があつ
 たよ ~~う~~ だ。漱石はそれを行の敬句として ~~と~~

了 小區

篇中の人物に吐かし居るから、何か軽ん
 しい、又多少の厭味もあつたけれど、其言葉
 は甚だよいものだと、當時心を動かさるたつ
 た。私は巴里の^小画商のケラヌ宮の中に、姪め
 てるドンを見附けた時、オツ、女房に居てく
 れたかと打たれた。その日は全く彼女の愛の美
 しさであつた。ルボンの画はよくいかへる。
 全く草上に座して、雲のたに和まむに
 たと全じ心を、珍らしくも持つた西洋
 画家かつた。
 (1020) YH特製

ルボンといふ人は、同じ草花を描くにして
 も、彼人は野花を好んだ。日本のよろあとし
 りてこそ、野花詩に歌に、俳句に、月
 並的に詠まれるけれど、西洋に在つて野花を
 描んで描く人は、本當に自然の愛に、深く突
 入した人で多くては、見らぬことだ。知り
 やもカリーネ・ミヨンも、美しいのは全く美し
 い。けれどその^{とは別に、}野花が美しくあ
 いとルボンは思はなかつた。彼は外の画家
 のようにカリーネ・ミヨンの美しさと、野蕪や

4 小巨

リアの美しさを、較べて描く。心の描く
 いかろく。野をの可憐に寂しい心を描く。描
 いた、思ふ事ある自然の愛者かと思ひしめる。
 私はいく、野草の上には清明な輝く日色を
 見つめろか、ルボンのことと思想あのか。
 今も猶生きて居て暮れるさう、それだけ
 山私は巴里へ行つて見たいと思ふ、私の草花
 と愛とを待つ数人の先輩中の一人だ。
 私は代々木の八幡の古林を以て、うつとりと
 して、よひ藝術家の荘に出ることか、あまり

(1020) YH特製

に動いこと眼をしはた、く。

黒土

草花野は土の毒界だ。下總堂陸が水の毒界
 であるよ、草花野は土に就いての種々相
 である。
 下總堂陸に山あり野ありけん、彼
 毒の土は水とふ明るさに取り合はさ水て、
 親しく美しい。草花野に水はあつて、地
 には水によつて親しいものより、より多く
 土と、草花と、推木とによつての親しい天地だ

恒

或花野に吹いて来る風は、水をぬかすの音を
 くて、雑木と草と下草かすの音。遠い風の音
 が、耳に寂しくひびくのは、榊や榊の木や、
 榊の林を動かすの音。冬の日が榊林の向ふに
 落ちて行く寂しさは、或花野といふ地上のも
 つ、平凡で又特異な情である。
 或花野の黒土の面に、黒松のよきくんと
 立つて居る。黙んまり返つて、しんとする静
 がさの共感の音が、忽ちゴキーンといふ音に
 変る。

(1020) YH特製

又、草は地上に吹き伏せられ、林は恐ろし
 い喜びを立て、天にも地にも、安らかぬ直線と
 いふものが多くあつて、あまりにはげしい曲
 線の在り方であつたのか、忽ち直線は安ら
 ぬの在り方に、曲線は可憐な容に返る。激
 郵の天地から、沈黙の安らかさに返る。
 とうとう小変化のある或花野の地上は、全く
 土の在りだ。黒土も黒松も、雑草も雑木林も
 全く土の二つの感情に包まれた地上である。
 かが私には、どつちを好くかと思ふは、

